

## 序

自由人ほど殊に不自由を庄しつけられる。漂浪者のなげきは、ここにあるのだ。到る処に青山があり、到る処に故郷ができるのであるが、それと同じく到る処に貧乏があり、到る処に苦闘がある。到る処に故郷が造られる為に到る処に苦闘が体験される。

放浪もまた戦いだ。建設の戦争だ。自由人の人生記は此世界的故郷建設戦の一記録に過ぎない。この書を世に送るに当り、家永三郎、鶴見俊輔、大沢正道諸氏の厚意に感謝する。

一九五六年六月九日

口述を終えて

石川三四郎

## 愚かなる石川君

本書の著者が私信の一節に曰く。

「サン・シモンが新基督教であつたか、労働組織論であつたかを著作するの際、其命を支へるに、パンと水との外無く、其酷寒中にも煖炉に火を得ること能はず、刺さへ筆墨を購ふために着換へなき唯一枚の外套を売却せざるを得ざりしとの事に候。然も斯くの如くにして漸く完成せし其稿も出版者を得ること能はず、之が補助を世の志士仁人に乞ひたれども、一人の顧慮する者無く、彼の英国のロバート・オーエンすら空しく之を返却し来り、サン・シモンは遂に餓死に迫りて辛くも一旧僕の救助を受くるに到りしとの事に候。今日の小生の境遇は敢て古の偉人に似たりと申すには非ざれども、先哲の实生活を伺うて聊か自ら慰め、自ら元気を鼓舞する次第に御座候。御承知の通り、小生獄中生活の記念たり又多少苦心の作たる『西洋社会主義史』は今尚ほ空しく筐底に朽ち果てんとし、劣作ながら『哲人カアペンター』は幸にして一出版者を得たれども、然も憐れむべし、其れさへ種々なる条件付きに候。……されどサン・シモン餓ゑたり。フリーエーも餓ゑたり。マゼニーは倫敦流浪中亦餓に迫りて自殺を企てたり。先哲皆然り。況んや凡庸の予に於てをやに候。……貧乏も徹底すれば案外呑氣になれるものに候。」

斯様な事情の下に『哲人カアペンター』は出版せらるるのである。

石川君も愚な人だ。郷里の埼玉でおとなしく小学教員でもして居たら、今頃は校長位になつて居たかも知れぬ。おとなしく養蚕でもして居たら、今頃小金も溜まり、村の物議り口ききで、村会議員、罷り違えば郡会議員に出世したかも知れぬ。それとも萬朝報社におとなしく辛抱して居たら、今頃は年功で顔も売れ、面白可笑しく世を渡つて居たかも知れぬ。大それた社会主義の畑なぞに踏み込み、苟も権力に盾つく様な馬鹿な真似をして、赤旗なぞ振り廻したために、首尾よく監獄の飯は喰う、注意人物の折紙はつけられる、十数分で息がとまる絞刑にこそならぬが、八方ふさがりの昨今は餓鬼道の苦艱でなくなく咽喉をしめられて居る。石川君から云へば、られて居る。世間から見れば石川君自身に於て居るのだ。自業自得だ。

世には物好きな者もあつて、ヤスナヤ、ポリヤナの大馬鹿爺なんかは、のたれ死がしたさに、わざわざ暖かな家庭の巢を夜ぬけして、到頭田舎停車場の駅長の部屋で苦しい息を引きとつた。大勢の人のあとから、おとなしく濶い道を跟いて行く者は兎に角、連れがあつても、無くつても、自流自盡の路を歩かずに居られぬ者は、或は時々、或は一生、荆棘の中を歩むのは覚悟の前でなければならぬ。『哲人カアペンター』は愚なる石川君が荆棘の路に流す血の一滴である。

一九一一年十二月十日

武蔵野の粕谷の墓守

徳富健次郎